

Title	イギリスの民族舞踊(2): ソード・ダンスに関する一考察
Sub Title	English folk dancing II discussions on Sword dance
Author	本間, 周子(Honma, Shuko)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	1975
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.15, No.1 (1975. 12) ,p.51- 62
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00150001-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

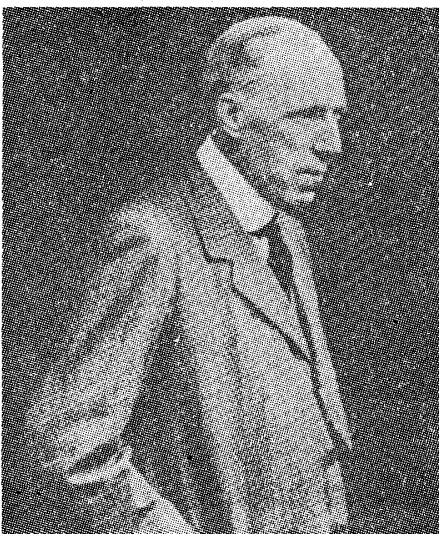
イギリスの民族舞踊(2)

——ソード・ダンスに関する一考察——

本 間 周 子*

序 論

イギリスの歴史的な民族舞踊 (Folk Dance) を代表する春のモリス・ダンス (Morris Dance) と冬のソード・ダンス (Sword Dance) は、両者ともに19世紀末セシル・シャープ (Cecil Sharp, ⁽¹⁾ 1859—1924) の再発見によるものである。実技者のウィリアム・キンバー (William Kimber) ⁽²⁾ の協力をえて、彼の精力的な発掘作業は初めてくわしく記録され (*The Sword Dance of Northern England*, 1919—22), その後における全国的な規模をもったこれらの研究と保存は、彼の功績に負うところがきわめて大きい。今回は前回の (体育研究所紀要第14巻第1号) のモリス・ダンスの研究に引き続いて、それと密接な関連にあるソード・ダンスの起原などについて、文献に基づき種々考察を試みたものである。



Cecil Sharp



William Kimber

* 慶應義塾大学体育研究所助教授

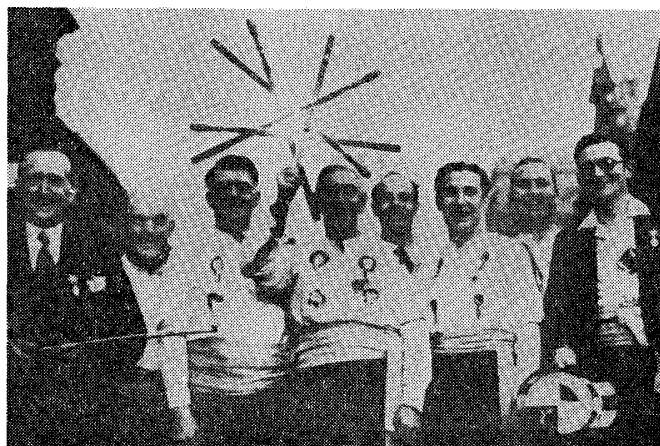
本 論

ソード・ダンスは、本来的には戦闘的性格をもった民族のなかで、戦闘のとき一騎打にみられる律動的、あるいは模倣的表現であろう。このダンスにこめられた内的意味が後に村の祭のときに豊饒を祈ったり、災害を防ぐなどの目的によって異なった形態に変えられていったのである。このダンスは、かつては本質的に軍事的性質をもっており、戦争崇拝 (War-cult) の要素もあったと思われるが、むしろグロテスクな登場人物との関連で農業的要素・祭儀的要素が強いものであり、宗教的行事をかねた娯楽として人気があり、北部ヨーロッパ各地、とくにドイツに生き続けている。イングランドでは北部地方のヨークシャー (Yorkshire)、ノーサンバーランド (Northumberland)、ダラム (Durham) に古い伝統的なものとして、ソード・ダンスの入った劇が残っている。

やがて劇からダンスが分離してゆくのであるが、実際に演ずるとき、ソード・ダンスだけの場合と劇的要素を含めたソード・ダンスの場合とがある。

この勇壮なソード・ダンスは、数人のダンサーがそれぞれ鉄製の刀、または前後にとつてのついたしなやかな剣をもち、かなりのスピードと、ゆったりした動作をしながら複雑なフィギュアを作りながら動き回り、あやとり遊びのような結び目を人の首の回りに作り、死と復活を表わしたりし、踊りと劇があるクライマックスに達したとき、剣を星形にからませたロック (Lock or Nut) を一人が高々と差し上げて観客に見せる。

これは全く男性だけの踊りであり、剣さばきとステップの技術的な技を見事なまでに発達さ



The Royal Earsdon Sword Dancers in the old days,
with Geordie Osborne as Captain and Jimmy MacKay
as fiddler

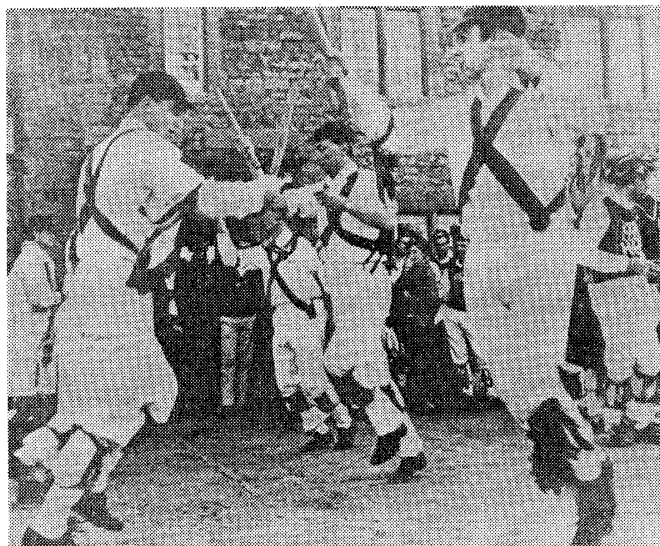
(Photo : Bill Cassie)

イギリスの民族舞踊(2)

せてきたのである。

モリス・ダンスのように、この踊りの目的も半魔術的・半宗教的であった遠い過去からの生活習慣や伝統によって伝わった複雑な劇的儀式の一部であることがわかってきた。

モリス・ダンスが春か初夏に行われたのに対し、ソード・ダンスは冬の最中、クリスマスごろに行われたのである。



The Headington Quarry Morris Dancers
(By courtesy of Brian Shuel)

聖霊降臨節後の第一月曜日のウイット・マンデー (Whit Monday) はモリス・マンのための日であり、一方クリスマスごろ、あるいは主頭祭後の第一月曜日のプラウ・マンデー (Plough Monday) はソード・マンのための日であった。ソード・ダンスが真冬のものというのは、むかしプラウ・マンデーに耕作などを始める習慣があったこととおそらく結びつくであろう。さらにこれらの演劇的要素を含んだダンスは、11月1日の万聖節 (All Saints' Day) 前夜や、11月2日の万霊節 (All Souls' Day) にも演じられたのである。

ソード・ダンサーは、モリス・ダンサーたちのように顔を黒く塗ったり、マスクで顔をかくしたりして変装した俳優であった。マスク(仮面)⁽³⁾をつけることは古代によくみられる慣習で、とくに古代ギリシャ劇で用いられた方法であり、アイスキュロス (Aeschylos) によって始めて劇中に用いられたのである。この方法は一段と劇の効果をあげるのである。古代人は仮面をつけたその時から神か悪魔か、いわゆる超人の世界に入るとも考えたのである。

モリス・ダンスでも、ソード・ダンスでも、ムーア人の踊り⁽⁴⁾ということによって顔を黒くぬることが関連しているが、この考えに対してイギリス演劇史の大家、E・K・チェンバーズ (E. K. Chambers) は『中世演劇』(The Mediaeval Stage, 1903年)において、このような習慣は原始宗教的な供物の火の灰で顔を黒くぬる、きわめて古い異教の儀式によるものと考えた。古代社会

において火はそれ自身非常に偉大な魔術師であり、その魔法は人間と生命を与える太陽とを結びつけるものであり、火や煤や緑樹は、死後生命を助長させるためのものと考えられ、踊り手も、その劇やダンスにかかわる道化達も共に原始的な礼拝者とみなされているのである。

このソード・ダンスと劇に登場する人物はダンサーのほかには、なじみの道化役者がいる。すなわちダーティ・ベット (Dirty Bet), キングとクィーン, 使用人ジャックを伴ったやぶ医者, そして馬の形を腰につけたホビー・ホース (Hobbyhorse) とよばれる者たちである。こっけいな、またグロテスクな道化役は二人 (場合によっては一人) で、一人はトミー (Tommy) で、キツネの毛皮や尻尾をつける。もう一人はベシー (Bessy) という女の姿をした男性, そして5~7人の踊り手があらわれる。道化がまず踊り手を一人ずつ観客に紹介し、それから踊り手は剣をもちあげ互いに剣を打ち合わせてから踊りが始まり、円を作ったりあるいは二人で一組になったりしながら踊る。円をつくるときは、前後のダンサーが剣の先あるいは剣の後をもってつながるのである。そして複雑なフィギュアをつくり、そのフィギュアをくぐりぬけたり、剣の下を通ったりする。踊りのクライマックスに達するたびにからめた剣 (Lock) を高く差し上げて、一種のミエのような仕草をする。ダンスのリーダー格はしばしば王 (The King) とよばれ、ときに、ダンスの終りなどにダンサー以外の道化役 (Fools) や女装のベティ (Betty) と一緒に劇に加わることがある。もちろんモリス・ダンスと同様に、笛・太鼓・ヴァイオリン・アコーディオンなどの音楽の伴奏を伴うのである。スコットランドのシェトランド・ダンス (Shetland Dance) では、グロテスクな人物は登場せず、イギリスのものに比べて民踊的要素がうすい。劇には短い幕間があり、各幕でソード・ダンスが踊られ劇が行われる。



The Abingdon Morris Dancers

モリス・ダンサーの服装は、シャツとズボンが白で、肩にダブル・ボールドリック (Double Baldric) と呼ぶ太いリボンを背中に斜め十字になるようにたすきがけにし、すねと足首をリボンでしばり、すねにつけられた多くの鈴がジャンプするたびににぎやかに鳴る。それに対し、ソード・ダンスの服装は、白あるいは黒の半ズボンにストッキングをつけ、腰に幅広いベルトをまく。上衣は白いシャツのもの、その上にチョッキをつけるもの、黒い上衣をつけるものなど、演ずるグループによってさまざまである。これらの踊り手や役者によって生と死のドラマが繰り広げられ、各場面にソード・ダンスが登場するのである。

イギリスの民族舞踊(2)

この死と復活のドラマは、人類学または民俗学の研究発達に伴って一層明らかになった。ジェームズ・フレイザー (James Frazer, 1854—1941) は、彼の民族習慣と信仰に関する有名な古典的研究『金枝篇』(*The Golden Bough*, 1890—1915) の中で、古代の人々が神と通ずるときに、模倣の魔術がいかにか普及していたか、世界各地の実例を出して説明している。それによれば未開民族は、しばしば彼ら自身の安全と世界の安全すらも人神、あるいは神の受肉たる人間の生命と緊密に関連していると信ずるのである。それゆえに、もし人神が自然死をとげたとなれば、人神に依存している自然の運行が破局を迎え繁栄は去り、彼らの存在そのものすら脅されるのである。すなわち神的存在である王や祭司に死をもたらす習慣は、彼らに樹木に果実⁽⁸⁾を实らせたり、農作物を成育させたり、家畜の繁殖をもたらせたりする呪術的な力を賦与されていると、崇拝者は信じるのである。人間の生命を不可避の老衰から救う唯一の手段を、ソード・ダンスの中の首切りに救済の一つの側面を見出すのである。しかしドラマでは死者はほとんどすぐに埃をはたきながら起き上り、「われ、よみがえり」と叫び、あるいはやぶ医者⁽⁸⁾の登場によって生き返るのである。そして人々は神的な霊が活発な姿のまま後継者に転移されるようにと願って、その王や祭司を人間の、家畜の、そしてまた作物の安寧に寄与するためのよりよき再生、もしくは復活となると考えるのである。

ソード・ダンスを今日では通常モリス・ダンスとは考えないけれども、昔はその土地土地によってソード・ダンサーはモリス・ダンサーと呼ばれていた。現在多くのモリス・メンズ・クラブ (Morris Men's Clubs) の人たちによってソード・ダンスは演じられている。ダンサーがいずれも素人であることは重要な点である。ソード・ダンスは用いられる剣の長さによって二種類に分けられている。一つはロング・ソード (long sword) を用いるもので、6～8人の男



The Handswoth Traditional Sword Dancers, Sheffield (Longsword)
(By courtesy of David Campbell, photographer, Saffron Walden)

イギリスの民族舞踊(2)

地図 ジョゼフ・ニーダムの作製した地図に基づく伝統的民族舞踊の図。
 アングロサクソン時代末期の政治を反映したものである。



イギリスの民族舞踊(2)

が30~40インチの長さの棒あるいは鋼鉄の剣を用いる。これをロング・ソード・ダンス (Long Sword Dance) と呼んでいる。ヨークシャー地方の剣は鋼鉄製で刃が厚く、長さが1メートル以上もある。地方によってはこの剣のかわりに木製の剣または棒を用いる所もあり、踊り方も地域によって特徴がある。⁽⁹⁾

昔はこの種類のダンスはヨークシャー全体、およびペナイン山脈 (Pennines)⁽¹⁰⁾ の東側にある隣接した各州で演じられていた。しかし現在ではわずかにシェフィールド (Sheffield) 附近と北部ヨークシャーのクリーヴランド (Cleveland) の二カ所で行われているだけであり、鉄を採鋳する村にこのダンスを行うクラブがいくつかある。

ノース・ライディング (North Riding) のエクスデールにあるほとんどの村は、長い剣のダンスの型をもっている。そのダンスは剣を互いにぶっつけあうことから始まり、曲芸的でもなく、踊り全体の作法はより精巧で儀礼的ではあるが、独特の魅力をもっている。ロング・ソードの先端に穴をあけてリボンをつけて他のダンサーがそれをにぎって連なり、さまざまな組み方をする場合もある。このダンスはドイツのものと似たところが見受けられる。

もう一つはノーサンバーランドやドラム地方の伝統で、ラッパー・ダンス (Rapper Dance or Short-Sword Dance) とよばれているものである。短くてしなやかな剣が使われ、それをラッパー (Rapper) と呼んでいる。5人のダンサーがこの剣をもって踊るが、彼らのほかに道化役のトミー (Tommy) とベティ (Betty) がおり、この二人はダンスの終りごろにこの剣をもってダンスの中にわりこんでふざけ回る。踊り方は前者のロング・ソード・ダンスの場合とたいしてかわらない。

ラッパーの剣は両端に柄がついており、手の中で刃を回したり、ねじったりできるように回転つき目がついている。モリス・ダンスとほぼ同じ音楽に合わせて若い踊り手は、個人的にも



The Newcastle University Sword Dancers

またグループにおいても威勢のよいかけ声をかけ、剣先と剣の刃のなかで活発で複雑なフィギュアをつくることが出来、高度に熟練されたダンスを構成する。

この種類のダンスが行われている地域は、ノーサンバーランドおよびダラム州のティン川 (Tyne) 沿いのかぎられたところで、今日知られている29のラッパー・ダンスの型のうち、15の型はわずか数マイルの円周内に見出されるのである。その踊り方は独特のもので、他国にその類は見られない。なおスコットランドのソード・ダンスは剣を手にもたず、二本の剣を十字に組んで地面におき、ダンサーがその剣にふれないようにとびこえたり、その中でステップを踏み、戦の吉凶をうらなったりしたダンスである。

ソード・ダンスは採炭業と密接な関係をもっているように思われる。鉄や鋼鉄の道具を使うこのダンスは、鉱石や燃料を採掘し、精錬した製鉄職人たちによって何百年も踊られてきたと考えられる。ここでのダンスは以前から祭礼習慣は全く残さず、その地方の死と復活に関する幸運の信仰が失くなった自然の結果として、ドラマからダンスが分離され娯楽としてアピールしたのであろう。

19世紀の著名なスコットランド人の小説家ウォルター・スコット (Walter Scott, 1771—1832) は、この対話と演技による劇をスコットランドのシェトランド諸島 (Shetlands) ⁽¹¹⁾ で目撃し、18世紀初頭に時代設定した小説『海賊』 (*The Pirate*, 1822) の中でとくに4章、14章、15章などで叙述してある。

“And the blithe dance at night,” added Brenda, in a tone betwixt reproach and vexation; “and the young men from the Isle of Paba that are to dance the sword-dance, whom shall we find to match them, for the honour of the main?”

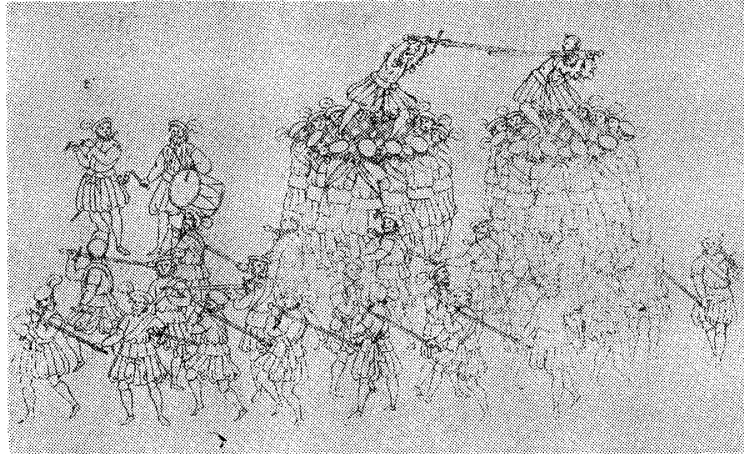
“There is many a merry dancer on the mainland, Brenda,” replied Mordaunt, “even if I should never rise on tiptoe again. And where good dancers are found, Brenda Troil will always find the best partner. I must trip it to-night through the Wastes of Dunrossness.” (第4章)

スコットはこのダンスの起原をスカンジナビアと考えた。その根拠の一つとしてはソード・ダンスが盛んな地域がヴァイキングの侵入し占領した地域、いわゆるディンロー (Danelaw) ⁽¹²⁾ とほぼ一致するからである。そしてヴァイキング移住者が支配したところに都市 (borough) をつくり、独特の方言の跡をとどめる地名を残したからである。しかしながら他方、広く分布している民俗劇やソード・ダンスの意味するところから考えると、ヴァイキングがイングランド北東部に最終的に移住するずっと以前からその本来の土地にあったものであるとも考えられる。

E・K・チェンバーズの『中世演劇』によれば、次のような事柄が記述されている。ドイツの考古学者が早くからこのダンスに注目していた。中世のはやい記録としては1350年ドイツのニュールンベルク (Nürnberg) でこれが人気のある ludus (=“play”) になっていたことが知

られている。中世の吟遊詩人 (Minstrels) もこのダンスを彼らのレパートリーに入れていたらしい。⁽¹³⁾

GERMANY. XVI. CENTURY,



SWORD DANCE OF THE CUTLERS' GUILD. PEN DRAWING.
(Nuremburg. Germanisches Museum)

この踊りは今日のドイツに当る地域で最も盛んであって、かなり古い歴史をもつようである。

古代ローマの歴史家タキトゥス (Tacitus, 55—120?) は『ゲルマニア』(Germania) 24章の冒頭部分でこのような踊りについて言及している。⁽¹⁴⁾

Genus spectaculorum unum atque in omni coetu idem: nudi iuvenes, quibus id ludicrum est, inter gladios se atque infestas frameas saltu iaciunt. exercitatio artem parvit, ars decorem, non in quaestum tamen aut mercedem: quamvis audacis lasciviae pretium est voluptas spectantium.⁽¹⁵⁾

それによれば、古代ゲルマン民族の娯楽としての見世物はただ一種類あるだけで、しかもどんな集りにおいてもきまってこれだけしか見られない。若者たちが裸となって脅かす剣や投槍の間で踊るのである。彼らはこれを娯楽のために行うのである。訓練が技巧を生み、技巧が優美を作りあげている。けれども儲けや収入が目あてではない。どんなに命知らずの遊びであろうとこれのただ一つの報酬は、見物人の喜びなのだ。

このように西暦1世紀のローマ人から見た古代ゲルマン民族社会の集会での楽しみとして、若者たちが勇壮な剣の舞を行うさまが記述されているのである。また8世紀初頭の作とされる古代英語の叙事詩『ベオウルフ』(Beowulf) 1040行目に “Sweorda-gelac” (=Sword play) という言葉が戦いの比喻として用いられている。この作品は主として大陸の古代デンマークの宮廷社会を背景とした作品であるが、このような断片的資料によってもソード・ダンスが北ヨーロッパに主として住んでいた古代ゲルマン民族と密接な関係のある民族舞踊であることが推定できると考えられる。

イギリスの民族舞踊(2)

このソード・ダンスと共に継承されているモリス・ダンスは、その起原においてソード・ダンスと関連があると思われる。ウイットサントイド (Whitsuntide) におけるモリス・ダンスとその劇を構成する登場人物は、ソード・ダンスとほぼ同じであり、モリス・ダンスにおいて使用される棒やハンケチは、剣の変化したものであるとも考えられる。

世界各地で踊られるこの舞踊は、異教の儀式の目的として、人を古い殻から脱せしめ、生命や力と新しい関係をもたせるものである。大自然の死と再生のしくみ、個人の犠牲などの表現は、その起原を古代ゲルマン社会、あるいはもっと古い原始社会にみられるソード・ダンスにあると考えられるのである。

このソード・ダンスは本質的には祭儀舞踊であり、農業的性格をもち、農村の季節の祭りで非常に人気のあったものと考えられる。

結 論

以上ソード・ダンスをまとめてみると、基本的要素としては、

1. 踊り手は男性だけで数人一組となり、通常ロング・ソード、またはラッパー (ショート・ソード) を用い、地域によっては木の棒、ベル、弓を使用するタイプがある。
2. 踊り手と共に、劇的要素をもったこっけいな、妙な服装をした道化、ホビー・ホース、キング、クィーンがダンスの中に加わり、農業上の祭礼のとき大変人気があった。
3. イングランド北部のノーサンバーランド附近ではこの種のダンスが多く、鉱山夫たちによって何百年も踊られてきたものであろう。その踊りは高度に熟練された技術を要し、複雑な剣の技巧が見られる。
4. ヨークシャー地方ではロング・ソードダンスが多く行われており、宗教儀式的であり、素朴なものの中に独特の雰囲気をもつものである。
5. イギリスでは毎年クリスマスごろと新年の間に行われ、旧い去ってゆく年、そして新しい年の誕生を象徴している。
6. この踊りを構成している要素は、それぞれ古代社会における樹木霊、豊饒の神、靈魂の継承、死と復活の中にその片りんを見出すことができるように思われる。
7. 歴史的には中産階級、上流階級の者が行ったようであるが、最近までは主として農民層が儀式的に行ってきたのである。
8. この踊りは英国のみならず、スペイン、ドイツ、スカンジナビア等、ヨーロッパ各地でも踊られており、モリス・ダンスとの密接な関連が考えられ、その起原は遠く古代ゲルマン社会、あるいはもっと古い原始社会にまで遡るものであり、宗教的、農業的色彩をもつもので

ある。

9. ソード・ダンスは歴史的には上述の特定地域、主としてイングランド北東部で行われていたが、現在ではモリス・ダンスと共に時期をとわずイングランド各地で見ることができる。とくに気候のよい夏には、この種のダンスを見る機会に恵まれるであろう。

以上、今回はソード・ダンスの原点をさぐってみたのであるが、これまでのところでは、ロング・ソード・ダンス、ラッパー・ソード・ダンスと伝承の具体的な過程については今後の研究に待たねばならない。この古代舞踊の発生的背景とその展開ならびにそれらを育んできた自然や、精神的風土とのかかわりについてはこれからの課題として更に考察を加えたい。

- 注 (1) セシル・シャープ 彼の研究の成果である Morris, Sword, Country Dance の著作は、イングランドの伝統的ダンスの貴重な研究資料である。1930年 English Folk Dance & Song Society の創始者セシル・シャープを記念して、シャープハウスが建設され、英本国のみならずその他各地で活動が行われている。
- (2) ウィリアム・キンパー モリス・ダンス・グループのリーダー兼手風琴弾きで、セシル・シャープに音楽と踊りの指導をし、また、研究のよき相手となった。
- (3) 仮面 「古典ギリシャ」高津春繁著、筑摩書房、昭和42年、p. 139.
- (4) ムーア人 サハラ砂漠、モロッコあたりに住み、黒人との混血といわれ、11世紀に北アフリカに進出、スペインを一時占領した。モリス・ダンスにおける顔を黒くする習慣はここに起因するという一説がある。
- (5) 緑樹 ヨーロッパはその歴史の黎明期において大原始林に覆いつくされ、樹木崇拜が重要な役割を果たしており、「ゲルマン人の最後の聖所は自然の森林である」とグリムは説明する。樹木崇拜の名残りとして「五月の樹」「五月の棒」のような習慣がヨーロッパ農民の通俗的祭礼に広くゆきわたっている。
「金枝篇」ジェー・ジー・フレイザー著、永橋卓介訳、岩波文庫、昭和26年、第1巻 第9章 pp. 254~255。第2巻 28章、pp. 284~286.
- (6) ホビー・ホース 馬の形を型どったものを人間が腰のまわりにつける。Animal Men とも呼ぶ。
- (7) 剣の先 ロング・ソード・ダンスでは、とがっている先端に穴をあけてリボンや布きれがつけられ、隣のダンサーが、そのひもをにぎって連なる。
- (8) 王や祭司に死をもたらす 神秘的な王や祭司は自然の死をとげることは許されない。人々は王の病が篤く死んだならば、その力と徳によって彼のみが支えている大地はたちどころに崩壊すると考える。彼の病が回復の見込みがなくなると、その後継者たちによって殺される。また衰弱の兆候である頭に白髪、顔にしわがあらわれ、前歯の1本を失った場合でも弑殺する種族もある。
「金枝篇」第2巻 第24章、pp. 227~241.
- (9) 木製の剣または棒 これはフラムボロウ・ソード・ダンス (Flamborough Sword Dance) (ロング・ソード) といわれている。北東部海岸・北海に面した漁業の町 Flamborough Head では、ソード・ダンスと呼ばれるが、木製の棒を用いる。
- (10) ペナイン山脈 イングランド北部の山系、主としてこの山脈の東側に多くのソード・ダンスが残されている。
- (11) シェトランド諸島 イギリス最北端の諸島で、スコットランドの一県をなす。メーンランド、イエル、アンスト、フェトラーをはじめ、大・小100余の島から成る。各所にソード・ダンスが残されている。1469年までノルウェー領であったため、スカンジナビア系の風習が残っている。

イギリスの民族舞踊(2)

- (12) ディンロー ヴァイキングの主力の一派であるディーン族に占領された、イングランド北東部地方。
- (13) E.K. Chambers, *The Mediaeval Stage*, Vol. I, p. 191.
- (14) タキトゥス 紀元一世紀の中頃から二世紀の始め、つまりローマ帝国の最盛期に生を受けた人である。代表作に「ゲルマーニア」「年代記」がある。「ゲルマーニア」の原題は「ゲルマーニア人の起原と風俗について」であつたらしい。彼はゲルマーニア人について風俗を紹介し、また、汚れなき野蛮人として彼らの底力を知り、ローマの同胞に注意を喚起し、ローマ人とゲルマーニア人を各方面から強く対照している。
- (15) タキトゥス「ゲルマーニア」(田中・国原訳), p. 58.

参考文献

- (1) Douglas Kennedy, *English Folk Dancing : Today and Yesterday*, London, 1964.
- (2) E.K. Chambers, *The Mediaeval Stage*, 2vols., Vol. I, Oxford, 1903.
- (3) Cecil J. Sharp and A.P. Oppé, *The Dance : An Historical Survey of Dancing in Europe*, London, 1924.
- (4) The Morris Ring, *The Morris and Sword Dances of England* n. d, The Hive Printers Ltd., Letchworth Garden City, Herefordshire.
- (5) Walter Scott, *The Pirate* (Everyman's Library, 1906, rpt., 1925)
- (6) タキトゥス (田中秀央・国原吉之助訳)「ゲルマーニヤ」大学書林, 昭和38年。
- (7) フレイザー (永橋卓介訳)「金枝篇」(1)―(5)岩波文庫 昭和26年。
- (8) 池間博之「英国の民族舞踊」不昧堂, 昭和50年。
- (9) J・ローソン (松本千代栄・森下はるみ訳)『フォークダンス』大修館, 昭和50年。
- (10) 高津春繁「古典ギリシヤ」筑摩書房, 昭和49年。